

人間のあたたかみ

長崎の仲間

百瀬直彦

ある日キブツ協会に成田英士君という人が訪れた。彼はすでに二年程長崎と諫早の間にある喜々津に住み、みずから百姓と名乗っている。彼はふとしたことから長崎市内小カ倉の藤田外科病院に面白い人たちが居ることを聞いて、そこに行った。そこで病院の土地である喜々津に住んで花を作ることを思いつき、独居し、時どき小カ倉を往復して考えつづけてきたという。

東京を出て二〇時間余、朝冷雨の降る博多で長崎行きの特急に乗り換えた。めざましく光る窓の外をながめると海が右手に、山並が左手に迫っている。山は小柄だが急である。山の中腹よりもお高くまでみかん畑に作られている。山あいには家が静かに息づいている。おだやかな海には緑の木にびっしりおおわれた島が点在している。

長崎駅頭には成田君が来てくれた。小カ倉に直行してそこに住む人たちに会っ

た。看護婦さん数人、呉服業手伝い二、三人、炊事、家事二、三人がいた。それに名前を持った数え切れない数の猫が部屋中にたむろしていた。実にもの静かな、丁寧な若い人たちである。はじめさんと呼ばれる前田哲宏君と話した。人間のこのころの問題について語る彼の口調には並々ならず驚かされた。これはあとで彼の母親の話も聞いて納得がいった。病院に縁を持つ人は四〇人を下らないという。そして場所さえあつたら、ともに暮らしたいとのこと。一度か二度ここに来て、そのなつかしさが忘れられず、住み込んでいる女性も何人かいる。そのなつかしさは説明できかねる。もしかしたら前世からの宿縁ではないかと思うほどに作爲のないものである。中心にいるへ奥様ははかつてへ牙」というサークルで前夫と共に活動していた。夫の死後二児と一諸に苦勞した。その間もかつていただいた人間のこのころへの深い傾きが消えなかつた。これこそ人間にとって最も重要なのに、多くの人はとりまぎれて忘れてしまう。それを批難することはできない。志を保つには大変な努力がいる。若い時は一燈園にあこがれたそうである。

その後、はじめさんと共に演劇をやった仲間、その他友人などが集まり、いつのまにか、こんなに多くの人たちにとってなつかしい場所になってしまったのだという。誰にもよそよそしくなく、べつたりでもない、ほのぼのとした心地良さ、生身の人間のあたたかみがこの家にはある。

ここに集まる仲間が長崎駅のすぐ近くに「からやん」という喫茶店を造っていた。店の改装から装飾、照明、すべて自分たちの手でやっている。その二階を事務所として、「がめんこ」の集まりがある。これも病院にゆかりある人を中心に、今のところ雑誌を作っている開いたサークルである。ゆくゆくはこの「がめんこ」も何かをしてゆく集いに生長させたいという。

▼「がめんこ」 長崎市大黒町4-5

喫茶からやん内

喜々津の土地は鳥の鳴く山あいにある。古い家と、その囲りに一町歩の斜面の土地がある。畑は成田君が休耕田を借りて園芸を行なっている。山羊もひとつがいている。猫もいる。奥様は、この喜々津が将来私たちの中心になるのではないのでしょうか、という。何か熟してくる気配がする。

告知板

■日本協同体協会

▽引越し以後、研究会等の活動がとまっています。活動の提案をどんどん出して下さい。

※東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイツ10 電三七〇二二八三

■「コミン」好き者会

▽旧「月刊キブツ関西読者会」で、名称が変わりました。月一度の定例会（京阪守口駅下車の守口市民会館で）、備北共同体の建設、「コミン往来」の発行などの活動をしている。

※尼崎市水堂榎木二〇 榎木荘内 今井みさを方

■名古屋読者会

▽毎月第四日曜日午後7時〜9時、F I W C 東海委員会事務所（新住所）昭和区丸屋町4-32

—6川村荘内三浦気付 電八五—三八七五—で例会をもつ。

※名古屋守山区小幡太田88 小幡団地58-1301 梶原方 電七九三—七二三七

■仙台読者会

▽月一度のペースで、キブツ、共同会などについて話合っています。今のテーマは人民公社。

※仙台市三百人町一五七松泉堂アパートA 大原輝一郎気付

■広島読者会

▽毎月第四日曜日五時から会合を持ち、備北共同会と密接に結びついてゆく予定。

※広島市青崎一—十四池田 敏雄気付 電82—七七五〇

■府中読者会

▽「土が欲しいもぐらの会」の研究会の延長として、毎月第二第四日曜日の夜にやっている。

※都下府中市四谷3-55-20 ぐるうぶ・もぐら 電〇四三三

—六四—一七二四

■F I W C 東海委員会

▽月二回金曜日に共同会研究会を、月二回土曜日に精薄問題研究会をしている。

※名古屋市昭和区丸屋町4-32 6川村荘内 三浦気付 電八五—一三八七五

■釜ヶ崎救援会

▽不当に弾圧されている釜ヶ崎労働者を権力の手から守るために支援を歓迎。

■みみずの会

▽毎月第四日曜日の午後六時半から新宿区立赤城社会教育会館で、「労働と人間関係」について考え合う。

※電 東京二五五—六八七一 東洋シユランク 北邦彦まで。

■一燈園

▽智徳研修会—毎月七日—十日におこない、実践研修を通して無所有奉仕の精神を学ぶ。会費

は三千円と米一・五キロ。

※京都市東山区山科四の宮 光泉林 電五八一—三三三六

■山岸会

▽特別講習研鑽会—三重県の本部では毎月1日、15日、北海道の別海町では毎月21日から、各一週間。費用は七千円。

※三重県阿山郡伊賀町春日 山岸会本部/東京都新宿区戸塚3-1-13 ヤマギシズム東京案内所 電三六八—四六五〇

■九州読者会

▽少しづつ読者会の形がつかられつつあります。

※福岡県三潴郡三潴町玉満二六三五の一 広松伸子気付 電〇九四二六—四二二二五

■三文評論

▽2月12日、3月4日に内村鑑三の読者会をします。

※長野県長野中央郵便局私書箱41号 三文評論

協会日誌

12月7日 長崎で面白い動きがあるというので、直彦が九州へ向かう。とても気持のよい若者たちの集団で、共同農場のよくなものもつくられる可能性があるという。

12月11日 姫路や大阪で自由連合の思想にもとづいて独自の運動を展開している向井孝氏がきて話す。いかに解放されたへ共同性」を創り出してゆかかというので、氏から学べるものは多い。

12月13日 千葉で農業をしつつ（若者の交流と創造の場）をつくらうと張り切っている志村学氏がくる。16才。仲間が欲しいという。

12月14日 かつて米軍脱走兵の救援組織である「ジャティク」の活動をしていたMさんがきて、その活動を支えていた人間

関係の生き生きとした手ごたえと重さについて話してくれる。

12月16日 どこかのテレビ制作の人たちがきて、（若者の共同会）について話を聞きたいという。まるでファッションを追うように「ゲバだ、ウーマンリブだ、共同体だ」と追っかけている様子。マスコミの狩人たちに乱暴されぬよう気をつけることだ。

12月18日—23日 第九回キブツ研修生グループの第一回合宿研修会を、代々木のオリンピック記念青少年総合センターでおこなう。三一名の研修生に対して、協会の四人のスタッフと奥村久雄氏が世話係として参加。

初日には、イスラエル大使館のカヴィシュ参事官が挨拶し、手塚さんが久しぶりに力のこもった話しをする。合宿中は、ヘブライ語学習、講義、話し合いなどピッシリおこなう。二日目は元研修生の村上寿美、伊藤勲の

二人がきて、キブツでの体験と現在の自分の課題について話してくれる。

12月21日 第一次カプリ・グループのメンバーだった定森正治氏がきて、仕事を手伝ってくれる。今度卒業して教師になるとのこと。

今号に書いてくれた吉田ミツオ氏がきて、あれこれ話してくる。山岸会の特講が面白かったという。彼の自己解放の旅はさらに続いてゆくだろう。

12月23日 何年ぶりかで日本へ帰ってきたというギヴァトハイム・グループの一員、井上正孝氏、ひよっこり顔出す。アメリカやヨーロッパで苦勞したらしい。

12月25日 音楽家の佐藤宏之氏、自分の生き方の根本をゆるがせてみるべくキブツへ行ってみたいといってくる。

制作部メモ

▼沈滞期に入ったようだ。安保、学園闘争、沖繩、公害など、外へ向けられつづけた眼が再び内側に向けられつつある。自分に近しく、そして仲々になじまない内側。宗教書、人生論、古典の売れる冬に入る。

それは危険を内包している。個人を徹底してつきつめたら天を抜き地を穿つが、中途半端な内面指向はベシズムを、英雄待望を、また反面殉教を呼び込む。ファッションや歌に代表されるリリズム、ロマンチズムはそのはしりである。

今こそ人間が集まればなんでもできることを立証しようではないか。

ヒコ

▼〈踏青〉、こんな言葉が好きです。昔、中国では二月一日を〈踏青節〉として、一日春の野

原にあそぶ慣わしがあったとか。厳しい冬がようやく過ぎて、人々はかすかな自然の息吹きにも微笑みをもらし、手足を伸ばし、たにちがいない。

たしかに、春は忘れずにめぐつてくる。だが、かぐわしい緑が重いコンクリートの下に封じこめられた、この灰色の都会でへ踏青青など……あまりにもうつろな響きしかもどってこない。さあ、野に出ようよ。 恭子

▼今年、現実にはコミュニケーションを建設するにあたって、どのような条件のもとで何を準備しなければならぬのかといった問題に取り組んでみたい。理念を構築すること、その理念を現実のなかに引きずりおろして実践することは、それぞれに別個な能力を要求される事柄である。我々は、なんにも持っていないし、こうした能力を備えているかどうかとも証明されていない。

生きがい

●感動の人生記録

手塚信吉著

A5判上製・700円 (送料110円)

平凡人の体験記録にすぎないが、永い七十余年を文字どおり精一パイ生き抜いてきた足跡を、日誌に基づいてまとめたものが、この『生きがい』である。時代は大きく変わったが人間の本质が変わりはないので、境遇を同じくする青年諸君には今日でも参考になるであろうと確信して、誇張も虚飾もなく正直に書いてみた。……人類は共同体なり、協同協力の中にのみ個人の安定も世界の平和もある。……(序文より)

日本の共同体

●一燈園／心境農産／前森山集団

農場／ヤマギシズム北試／東山産業

A5判・二〇〇円 (送料三五円)

日本協同体協会

東京都渋谷区代々木4-5-14
振替 東京 24403

だが、どんな土地があるのか、どのくらい資金が必要なのか、といった点が少しでも明らかにされることによって、まわり道をせずに核心へせまっていけることができるかもしれない。尤士

▼最近、あちこちで、共同生活をはじめたとか連合体をつくつたとか農場を建設するとか、よく聞く。それら一つ一つは、山

奥の細流のように目立たぬ味な動きだ。だが、それらが次第に合流していった時の流れの巨大さを手感しないわけにはゆかない。激しい行動の季節は、強力な弾圧の下で閉じこめられつつあるのかも知れないが、新たなゆとりとした、だがもっと根源的な行動の底流が、厚い氷の下で渦巻いているようだ。 哲

■直接購読(入会)のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者(キブツ会会員)によって支えられています。1年間(12号)の会費は入会金とも2000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書きそえて、送って下さい。

■東京=新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店、大阪=曾根崎書店、ウニタ書店、京都=京都書院、札幌=富貴堂、北大生協、アテネ駅前店、仙台=八重州書房、盛岡=第一書房、福岡=九大生協、富山=清明堂、名古屋=おばた文庫、松本=遠兵ブックセンター

■印刷所=創土社 東京都港区芝5-16-13
電話 452-0501・6069

月刊キブツ 1972年2月(通巻95号)

頒価 150円-送料16円(1年間2000円)

東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイ

ツ10号 日本協同体協会

電話 370-2813 振替・東京 24403

■次の書籍は、本協会でも販売取扱いをしていきます

生きがい

手塚信吉著

日本協同協会/頒価・七〇〇円/送料・一四〇円

日本の共同体

手塚信吉・草刈善造著

日本協同体協会/頒価・二〇〇円/送料・三五円

もう一つの社会キブツ H・D・ドラブキン著/草刈善造訳

キブツ——その社会学的分析—— 山根常男著

キブツの教育 A・I・ラビン著/草刈善造・奈良一三訳

キブツのこともたち 誠信書房/定価・三八〇〇円

キブツの教育 大成出版/定価・一六〇〇円/送料・一四〇円

キブツのこともたち 誠信書房/定価・二二〇〇円/送料・一四〇円

キブツ・戦争・オレンジ 西本とみ著

アグリントラス 芙蓉書房/定価・五八〇円/送料・一一〇円

アグリントラス H・ハルペリン/飛田徳三訳

ユタヤ民族——その四千年の歩み 大成出版/定価・一七〇〇円/送料・一四〇円

ユタヤ民族——その四千年の歩み 誠信書房/定価・一五〇〇円/送料・一一〇円

ユタヤ民族——その四千年の歩み 小辻誠祐著

ユタヤ民族——その四千年の歩み 誠信書房/定価・一五〇〇円/送料・一一〇円